

まにおほひ、柄を右の手にて持被申候へば、是非とも人をば手撃にいたされ候。近習の者共、兼て其心得有之候に付、其者のはづし不申様に仕事に候。依之右左平次を、近習の者七八人にて、前後左右より取巻き罷在候。左平次致覺悟候に付、謹で大夫殿へ申上候は、私事無調法成仕形に付、御手討に被成候儀は奉畏候。但一言申上度儀御座候間、其内御待被遊可被下候。此度免高の儀は、元來私不案内にて再往御斷申上候所、何の手間も不入事、奉行に付て居候へば能く候旨、御直に被仰聞候故、其通に相心得候所、右の仕合に御座候。然所御手討に被成候は、御無理と申者に候。天下の者左衛門大夫殿は、御名將ととなへ申候故、誠に御名將と存じ御奉公に罷出候所、私の目利そこなひ仕候と申候所、笑被申候て、扱は某をば名將と申候よなと被申候て、手討に不被仕、奥へ入被申候。危き命助かり、か様の所には不入事と存じ、其後暇を請立退申候。先生話

一、寒中手取川へ舟梁を架くる事

大正持候大儀御中風の時、俄に大正持へ御見舞可被遊旨、被仰出候。其夜天和二年十月十四日奥村壹岐前儀御次に承、先づ越前

へ御案内有之可然存候旨被申上、則御使者被遣候。此時小松城へ御立寄、御使者罷歸、此御使者の儀、藤田丈人及村氏へ尋候。そのうへにて大正持へ被成御座候。小松御城内用意に、湯原源七大工役人等三百人許召連れ、急に小松へ罷越候に付、右御使者を以て案内以前に、越前へは相聞入候旨也。寒中の儀に付手取川舟梁をかけ候。水凍候て川下より常の通舟を挽あげ申候内に、はや水凍何とも可仕様無之、奉行以下令難儀候。此時本吉村の老農、此様子承り、年わかきもの共未知ていなり。寒中は舟梁のかけ様有之候。我等を河端へつれ參候はゞ、敦可申と申候に付召連參候所、數十艘の舟を川中をば挽不申、兩岸へ相わけて引あげ、雪のうへを引かせ候へば、容易く舟梁の場迄參申候。扱兩岸より一艘々々打入候へば、難なく早速かゝり申候。寺西話

一、鳩巢先生印文

鳩巢先生印文。備中丹姓英賀郡人八字靜儉齋諱道雲篆文并刻。

魯有大臣史失其名。揚子法言。叔孫通故事。

一、前田直之火器稽古を令停らる

寛文・延寶の間、金澤に小川權右衛門といふものあり。高麗

流といふ鐵炮の術を致へ、火箭等の火器妙藝を盡せり。例年執政官の指圖にて、宮腰つゞきの海濱にて、其藝を學習いたし候。或年宮腰にては、御城へ近く響候てあしく候に付、本吉浦にて稽古申渡候。橋右衛門外小川七丞、小川茂右衛門。是體に高麗語也。此四人也。小松御城代前田三左衛門直之、於小松此由を傳聞て、學習の者共を抑へ置き、使番等を出し、小松城下より指圖無之内は不可打候。若推て大箭等學候もの有之候はゞ、捕候様に被申付候。其趣段々金澤年寄中へ相聞候に付、年寄中より早使を以て、先達て不及案内候儀不念の至に候。拙子共承届候て、爲致稽古候儀無紛候。御聞届候て稽古仕候様にいたし度存候旨被申遣候所、拙子年老候て薬を結たる様に罷成候共、いまだ御城代は相勤罷在候。か様の儀不及御沙汰候ては、以來小松城下騒動に罷成儀も可有之候。兼て其心得有之様にと被致返答候。

一、天海、陽廣公の徳量を嘆稱す

陽廣公の御時、南光坊天海を御招請の事あり。御書院棚の飾に、御什物の公任の朗詠集被置候。天海、公の御度量を窺見んとおもひ、右の朗詠集を幾度も玩覽し、扱被申候は、

近頃見事なるものに候。拙僧拜受仕度存候旨申候へば、御笑被成候て、則御贈被成候旨に仰候。天海おしいたゞき、その儘携へ被罷歸候時分、御式臺にて御小姓衆へ挨拶候て、是は今日拙僧がみやげにて候間、追て可有御上の旨にて、右朗詠集相渡退出にて候。其後天海此事を申出し、少將公御徳量御すぐれ被成候。御眼面少しも變じ不申候とて、致嘆稱候よし。亥九月五日 先生話

天海が桀黠可惡の心入は必しも不足論か。小人の腹を以て君子の心を計るもの多くは如此。可笑。愚評

一、酒茶の一聯當意即妙

川村彌兵衛より片楮を以て申越候は、酒茶を對に仕候一聯句、急に入用の儀候。御考被申候て此使に可被下候。若御考索難成候はゞ、御自作にても望に存候由申來候。罹火災候後詩文の書一部も無之候へば、考可申様は元より無之候。一聯を存寄り相調遣候所、彌兵衛殊の外悦申候て、其謝にとて則此一聯を書して贈候。深見新右衛門手跡を學び、よほど書法も能く候。右の一聯に云。同日

李白三盃通大道。盧同兩腋起清風。